

## 研究報告

### リハビリテーションの必要な患者を受け持った学生の学び

南川 貴子, 田村 綾子, 市原 多香子, 桑村 由美,  
近藤 裕子, 板東 孝枝

徳島大学医学部保健学科看護学専攻

**要旨** 運動機能障害や意識レベルの障害があり、リハビリテーション看護の必要な患者を受け持った学生の実習終了後のレポートより、学生の学びを抽出し、内容分析を行った。その結果、203コードが抽出でき、39サブカテゴリー、10カテゴリーに分類できた。その内容は『リハビリテーション看護の方法の理解と必要性の自覚』、『患者の状況・把握の重要性と判断の難しさ』、『リハビリテーションの必要な患者の思い』、『看護師としての役割の自覚』、『看護のやりがいの実感』、『医療者の連携の重要性』、『家族への援助の必要性』、『コミュニケーションの重要性と難しさ』、『安全確保の重要性と難しさ』、『説明・指導・教育の重要性と難しさ』であった。この中で『リハビリテーションの必要な患者の思い』、『看護のやりがいの実感』、『安全確保の重要性と難しさ』の3つが、リハビリテーション看護の必要な、運動機能障害や意識レベルの障害がある患者についての特徴的な学びであることがわかった。

キーワード：リハビリテーション看護、実習、学生の学び、内容分析

#### はじめに

リハビリテーションの必要な患者の看護では、突然発症した脳卒中などによる意識障害や片麻痺・失語症の出現、骨折などが原因で急激に生活機能が変化し、今までの生活を再構築する必要がある。看護師による日常生活動作（ADL）の回復に向けた支援がたいへん重要となる。看護学生は、成人看護学臨地実習時に、このような機能障害に対しリハビリテーションの必要がある患者を受け持ち、教員と看護師の指導のもとに受け持ち患者の看護過程を展開している。今回、私達はリハビリテーションの必要な患者を受け持った学生が、成人看護学の臨地実習の中でどのような学びの内容であるか疑問をもった。

リハビリテーションの必要な患者に対する実習での学生の学びについての先行研究では、リハビリテーション領域のミニマムエッセンシャルズ（最低限必要な教育内

容）の構築を目標とした研究<sup>1)</sup>や、学生の学びと実習目標との関連をみた研究<sup>2)</sup>や、リハビリテーション看護実習は情意、精神的運動領域の学びが多く得られていた<sup>3)</sup>ことが明らかにされていた。しかし、運動機能や意識障害などのためリハビリテーションが必要な患者を受け持った学生の学びについて分析が行なわれた研究は見あたらなかった。

そこで、リハビリテーションの必要な患者の看護を体験した学生の、実習の学びの内容を明らかにし、今後の指導方法に生かしたいと考えた。

#### 目 的

リハビリテーションの必要な患者を受け持った学生の学びの内容を実習記録の分析から明らかにし、今後の学生指導の一助とする。

#### 用語の定義

ここで言うリハビリテーションの必要な患者に対する看護の定義とは「リハビリテーション過程の促進を目指した多職種チームによるアプローチのなかで、身体的ま

2007年1月31日受付

2007年4月27日受理

別刷請求先：南川貴子，〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15  
徳島大学医学部保健学科看護学専攻

たは精神的障害、慢性疾患、老化に伴う生活の質を向上させるために、看護師の専門的な知識と技術をもって行うケアである」<sup>4)</sup>とした。

## 方 法

対象：2004年9月～翌年2月までに、成人看護学臨地実習で、運動機能障害や意識レベルの障害などがあり、生活の再構築のためのリハビリテーションの必要な患者を受け持ったA大学の看護学を専攻している3年生65名のうち、研究の同意を得た学生63名を対象とした。このうちの3名は記載が不十分であったため集計より除き、合計60名の実習終了時のレポートを対象とした。

実習の概要：今回対象とした実習は、A病院にて運動機能や意識の障害があり、リハビリテーションの必要な患者を受け持ち、その患者の看護過程の展開を実施する実習である。

A大学の学生の背景は、講義に関しては基礎的な科目及び、成人看護学に関する講義の科目は実習の開始前までにすべて履修している。実習に関しては基礎看護実習が終了している状況である。3年次に行われる臨地実習は、16週間で成人看護学実習（生活の再構築が必要な患者の看護、再調整が必要な患者の看護、侵襲下にある患者に関する看護）、高齢者看護学臨地実習、精神看護学臨地実習、母性看護学臨地実習、小児看護学臨地実習で構成されている。今回の研究対象となった実習は、成人看護学臨地実習（生活の再構築の必要な患者に対する看護）で、実習の期間は2週間であった。

### リハビリテーションの必要な患者の看護の講義と実習の目標について

A大学において学生は、リハビリテーションの必要な患者の看護を、成人看護学の講義の中で「リハビリテーション看護論」として講義を受けている。このリハビリテーション看護論の学習目標は、①生活の再構築が必要な患者およびその家族の反応を統合的に理解する。②身体機能を評価する方法を理解する。③健康問題および基本的な看護活動を理解する。という3つである。このリハビリテーション看護論の演習では、片麻痺患者のADLについて体験を実施している。

今回研究対象とした成人看護学臨地実習（生活の再構築）では、入院して何らかの機能障害をきたし、リ

ハビリテーションの必要な患者を1～2名受け持って看護実習を行っている。この実習目標は受け持ち患者に対して学生が看護過程を用いて対象者の健康問題を解決し、科学的でかつ論理的な問題解決能力を養うこと、実習体験を通して批判的・創造的思考を深めること、自己の看護観・倫理観・職業観を発展させることである。

### 受け持ち患者の概要について

今回、研究対象とした学生の受け持った患者は、運動機能障害や意識レベルの障害、失語症などが原因として、リハビリテーションの必要な患者とした。これらの障害を持つ入院中の患者は、手術後もしくは発症直後の患者が多く、ともに日常生活の自立には困難があつて、リハビリテーション看護が必要となるという共通点がある。学生が受け持った患者の障害の内容は、変形性関節疾患を原因として、人工関節置換術後の患者、脳・脊髄腫瘍や脳血管障害で麻痺や意識障害・言語障害・嚥下障害などが出現した患者などであった。また今回の受け持ち患者は、急性期（発病当初の生命の危機は脱した時期）あるいは積極的リハビリテーション期（症状が安定し障害された機能が明らかにあり、積極的にリハビリテーションを行う時期）<sup>5)</sup>の時期にあたる患者であった。

分析方法：学生が実習終了時に実習のまとめとして、リハビリテーションの必要な患者を受け持った「実習で学んだこと」について記載したレポートを提出させている。このレポートの目的は、学生に実習の振り返りをさせて、今後の学習に役立てるといふことと、教員及び臨床の指導者が臨地実習での学生の学びを理解し、今後の実習に役立てるなどである。この「実習で学んだこと」というテーマのレポートは、学生の思いのまま書くように指導し、学生が経験したこと、患者に対する思い、などさまざまな意見が出てきていた。なお実習終了後には、このレポートとは別に実習目標の達成レベルを確認するために、実習目標にそつての自己評価を、評価表を使用して自己評価を実施している。今回は、このレポートについて、内容を精読し、「学び」について書かれている文を抽出し、1文章1内容の文を1つの記録単位とした。この記録単位で内容の類似するもの毎に集め、分類・抽象化しカテゴリー化した。カテゴリー化の信頼性はスコットの式により算出し、一致率は89.2%であった。

倫理的配慮：対象となった学生に対しては、口頭および書面にて以下について説明した。実習記録を研究に用いること、成績とは関係なく、強制ではないこと、個人の秘密は守られること、いつでも承諾したことが取り消せること等である。学生の承諾が得られたもののみを研究対象とした。

## 結 果

レポートからの学びについての記載は203コードが抽出できた。(表1参照)このコードは、39サブカテゴリーと10カテゴリーに分類できた。学びの記載で最も多かったカテゴリーは、『リハビリテーション看護の方法の理解と必要性の自覚(コード数45件 以下カッコ内コード数)』であった。以下カテゴリーを順にあげると『患者の状況・状態判断の重要性と難しさ(40件)』、『リハビリテーションの必要な患者の思い(25件)』、『看護師としての役割の自覚(21件)』、『看護のやりがいの実感(17件)』、『医療者の連携の重要性(17件)』、『家族への援助の必要性(12件)』、『コミュニケーションの重要性と難しさ(12件)』、『安全確保の重要性と難しさ(9件)』、『説明・指導・教育の重要性と難しさ(5件)』であった。

### 1. 『リハビリテーション看護の方法の理解と必要性の自覚』

このカテゴリーは45のコードが抽出できた。サブカテゴリーは11であった。学生は、「看護師が日常生活援助の中で行っているリハビリテーションの方法」や、「個々の患者に応じた援助の必要性」や、「毎日運動療法を継続することが大切だと実感」し、「早期からの運動療法の必要性」を学んでいた。また「患者の障害の受容を援助しながらリハビリテーションをすすめることの大切さを実感」し、「観察や身体的評価の重要性」を理解していた。

### 2. 『患者の状況・状態判断の重要性と難しさ』

このカテゴリーは40のコードが抽出できた。サブカテゴリーは5つであった。学生は「患者の状況・状態の判断が重要」であることがわかり、「自分の知識の必要性を実感」していた。また日常の看護ケアを通して「患者の状態の判断が重要であること」を理解していた。しかし学生にとって、「意識レベルや筋力・ADLの状況などの判断・分析」や、「患者をどこまでどのように援助すべきかの判断」が難しかったという結果であった。

### 3. 『リハビリテーションの必要な患者の思い』

このカテゴリーは25のコードが抽出できた。サブカテゴリーは6つであった。学生が「ベッドサイドで患者の話を傾聴」し、「患者が医療やリハビリテーションについて感じていることや看護師に遠慮していること」など患者の気持ちや思いを患者の生の声を聴き、患者の身になって考え行動する必要性を理解していた。そして「患者に対しての精神的な援助や患者の意欲を向上させる難しさ」を感じていた。

### 4. 『看護師としての役割の自覚』

このカテゴリーは21のコードが抽出できた。サブカテゴリーは4つであった。「看護師の患者への対応の姿勢」を理解し、看護師が患者にどのように支援するか原則と、「患者のリハビリテーションを援助する看護師の役割」とともに、「患者間の関係の調整」などを再認識していた。

### 5. 『看護のやりがいの実感』

このカテゴリーは17のコードが抽出できた。サブカテゴリーは2つであった。「患者が回復してゆく過程を患者とともに経験し、やりがいや達成感を感じ」ていた。また「看護師の行うリハビリテーションにより患者の状況が変わるのを体験し、看護のやりがいを実感」していた。

### 6. 『医療の連携の重要性』

このカテゴリーも17のコードが抽出できた。サブカテゴリーは3つであった。「他の医療従事者(理学療法士、言語聴覚士など)との連携の重要性」がわかり、「学生も医療チームの一員としての責任を自覚」していた。また「急性期の病院の役割と他病院との連携」を実感していた。

### 7. 『家族への援助の必要性』

このカテゴリーは12のコードが抽出できた。サブカテゴリーは1つであった。「家族への援助の必要性」を理解していた。

### 8. 『コミュニケーションの重要性と難しさ』

このカテゴリーは12のコードが抽出できた。サブカテゴリーは2つであった。「意識障害や言語障害のある患者との言語的コミュニケーションをとること」は難しく、「非言語的コミュニケーションの大切さ」を理解していた。

表1 リハビリテーションの必要な患者を受け持った学生の学び

n=203

| カテゴリー                         | サブカテゴリー                                      | 総数 |
|-------------------------------|--|----|
| リハビリテーション看護の方法の理解と必要性の自覚 【45】 | 看護師が行う日常生活援助を行うの中で運動療法と再構築の方法がわかった           | 7  |
|                               | 個々の患者に応じた援助の必要性がわかった                         | 6  |
|                               | 実施した看護ケアの効果とポイントがわかった                        | 6  |
|                               | 観察や身体評価の重要性がわかった                             | 5  |
|                               | 毎日運動療法を継続することが大切だと実感した                       | 5  |
|                               | 早期からの運動療法の必要性がわかった                           | 4  |
|                               | 日常生活で基本的なケアの必要性を再認識した                        | 3  |
|                               | 立てた計画を修正することでよりよい看護を実践できることを実感した             | 3  |
|                               | リハビリテーションによって患者が回復していくのを見て驚いた                | 3  |
|                               | 実際に患者を見て、講義で習った知識がより深まった                     | 2  |
|                               | 患者の障害の受容を援助しながら再構築をすすめることの大切さを実感した           | 1  |
| 患者の状況・状態判断の重要性と難しさ 【40】       | 患者の状況・状態の把握が重要であることがわかった                     | 16 |
|                               | 患者をどこまでどのように援助すべきかの判断が難しかった                  | 13 |
|                               | 自分の知識の必要性を実感した                               | 5  |
|                               | 看護ケアを通しての患者の把握ができた                           | 4  |
|                               | 意識レベルや筋力、ADLの状況などの判断・分析が難しかった                | 2  |
| リハビリテーションの必要な患者の思い 【25】       | リハビリテーションの必要な患者の気持ちを知り、精神的な援助の必要性がわかった       | 6  |
|                               | 患者のベッドサイドでいることで、患者の変化や思いがわかった                | 5  |
|                               | 患者の身になって考え行動する必要性がわかった                       | 5  |
|                               | 患者の視点から、医療について感じていることや遠慮していることをわかった          | 4  |
|                               | 患者の話しを傾聴する大切さがわかった                           | 3  |
|                               | 患者の意欲を向上させる難しさがわかった                          | 2  |
| 看護師としての役割の自覚 【21】             | 看護師の患者への対応の姿勢がわかった(看護師が患者にどのように対応するべきかがわかった) | 14 |
|                               | 患者のリハビリテーションを援助する看護師の役割がわかった                 | 4  |
|                               | 看護ケアによって患者との関係形成につながった                       | 2  |
|                               | 大部屋で患者間の関係性の調節を行う必要性がわかった                    | 1  |
| 看護のやりがいの実感 【17】               | 患者が回復してゆく過程を患者とともに経験し、やりがいや達成感を感じた           | 13 |
|                               | 看護師の行うリハビリにより患者の状況が変わるのを体験し、看護のやりがいを実感した     | 4  |
| 医療者の連携の重要性 【17】               | 他の医療従事者(PT, STなど)との連携の重要性がわかった               | 13 |
|                               | 学生も医療チームの一員としての責任を自覚した                       | 2  |
|                               | 急性期の病院の役割と他病院との連携を実感した                       | 2  |
| 家族への援助の必要性 【12】               | 家族への援助の必要性がわかった                              | 12 |
| コミュニケーションの重要性と難しさ 【12】        | 非言語的コミュニケーションの大切さがわかった                       | 8  |
|                               | 意識障害や言語障害のある患者との言語的コミュニケーションが難しかった           | 4  |
| 安全確保の重要性と難しさ 【9】              | 安全の保持の重要性がわかった                               | 3  |
|                               | 環境整備が患者の安全の保持やADLに影響して大切であることがわかった           | 3  |
|                               | 安全の保持の対策について難しいので悩んだ                         | 2  |
|                               | 自立の推進と安全の確保の兼ね合いが難しく悩んだ                      | 1  |
| 説明・指導・教育の重要性と難しさ 【5】          | 説明・指導・教育の難しさと重要性を痛感した                        | 5  |

### 9. 『安全確保の重要性と難しさ』

このカテゴリーは9のコードが抽出できた。サブカテゴリーは4つであった。学生は「安全の保持の重要性」と、「環境整備が患者の安全の保持に影響して大切である」ことを理解していた。「患者の安全保持の対策」、「自立の推進と安全の確保の兼ね合い」については、難しく悩んでいた。

### 10. 『説明・指導・教育の重要性と難しさ』

このカテゴリーは5コードが抽出できた。サブカテゴリーは1つであった。「説明・指導・教育の難しさ」と重要性」を痛感していた。

## 考 察

運動機能障害や意識レベルの障害などがあり、リハビリテーションの必要な患者を受け持った学生の実習終了後のレポートより、学生の学びを抽出して内容分析を行った。その結果、203コードの記載が抽出され、39サブカテゴリー、10カテゴリーに分類できた。今回の分析では、学生は病棟で『リハビリテーション看護の方法の理解と必要性の自覚』をしていた。受け持った患者によって、患者の状態はさまざまであるが、いずれもリハビリテーションの必要な患者であり、学生は受け持ち患者についてのリハビリテーション看護の方法と必要性を学んでいた。また、学生は患者の状態に応じた清拭や手浴、足浴、清拭など基本的な看護ケアの必要性を理解していた。

また受け持ち患者を通して『リハビリテーションの必要な患者の思い』、『家族への援助の必要性』に気づいていた。学生が臨床で患者や家族に対する思いを考え、看護すること、学生が自らの看護観を築いていく上で大変重要な機会になっていると考える。『医療の連携についての重要性』も学んでいた。学生は実際にリハビリテーションの必要な患者の看護を体験すると、『患者の状況・状態の把握とその重要性と判断の難しさ』を学び、『説明・指導・教育の重要性と難しさ』、『安全確保の重要性と難しさ』、『コミュニケーションの重要性と難しさ』などさまざまな看護の重要性と難しさを学んでいた。これらの学びを経験した学生が『看護のやりがいの実感』につながったと考える。

上記の学生の学びの中には、リハビリテーション領域での看護実習での先行研究<sup>1-3)</sup>では抽出されていなかった

学びの内容が3つあった。それは、『安全確保の重要性と難しさ』、『リハビリテーションの必要な患者の思い』、『看護のやりがいの実感』であった。

### 1. 『安全確保の重要性と難しさ』

リハビリテーションの必要な患者を受け持った場合は、患者のADLの自立や関節可動域（ROM）に支障がある場合が多く、事故の中でも特に転倒や転落のリスクが非常に高い。そのため、「患者の安全確保」のための援助は特に重要になる。

安全確保については大学教育では、「安全管理の技術」として「看護基本技術として卒業までに確実に身に付けておくべきもの」として位置づけられており<sup>6)</sup>、また2004年に出された「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」<sup>7)</sup>の中では、リハビリテーション必要な患者の看護については「治療・回復過程に沿った安全で安楽な日常生活を支援する。回復のための早期リハビリテーションを計画し、実施を援助し、また、回復過程の進行を支援する。」と述べられており、卒業時の学生の達成度は「自立してできること」が目標となっている。

患者に対して安全確保を行うことは、看護にとっては原則的・基本的かつ重要なことであり、患者の安全確保については、学生は看護の講義の中では初歩の段階からさまざまな講義の中で学んできている。そのため、われわれは臨地実習開始時には、学生が患者の安全確保が大変重要であることは理解していると考え。しかし運動機能障害のある患者での安全確保の実施については、患者によっては自分の心身の変化に対する認識が低く、転倒や転落の危険性が高い場合もあり安全の確保が困難な場合も多い。学生には患者の状態を正確に把握・判断・評価し、患者に応じた患者の自立を妨げないような援助方法を学生に考察させる必要がある。

### 2. 『リハビリテーションの必要な患者の思いの理解』

学生が受け持った患者は、生活の再構築が必要な患者で、運動機能障害や意識レベルの障害などがあり、リハビリテーションの必要な患者であった。このような患者の中には「家族に迷惑をかけるから早く良くなりしたい」など早期回復の希望を持ち、リハビリテーションに対する意欲のある患者も多い。反面、突然の発症によって危機状況を体験する患者もおり、「リハビリテーションしたら良くなるのだろうか」、「どこまで良くなるのかな」など機能の回復に対しての不安を持っている患者や、発

症後にうつ状態に陥った患者，リハビリの意欲が低下している患者も少なくない。このようなさまざまな患者の思いを知り，意欲の向上を図ることは，学生にとっては難しい。しかし学生は，患者に寄り添って患者の思いを知りながら，患者がスムーズに生活の再構築が行えるように支援することが大切である。そのためには，客観的に患者の状況を見極める評価方法の活用も重要であり，他の医療職者と共有できるような評価法を活用するための知識が必要となる。

### 3. 『看護のやりがいの実感』

学生は実習を通して，言語的なコミュニケーションが取れない患者でも，非言語的コミュニケーションで患者との意思疎通ができることを体験したり，学生が患者の回復して行く過程を患者とともに体験したりすることで，今回の場合は看護のやりがいや達成感を体験できていた。このやりがいや達成感を体験することは，看護職を目指す学生にとってはたいへん貴重な経験になったと考える。学生がこのような経験をするためには，受け持ち患者の選択がたいへん重要である。指導者は受け持ち患者選択時には，短い実習期間内に患者がいかに変化するか，患者よりどのようなことが学べるかの見通しを立てて，受け持ち患者を決定することが必須となる。

### 本研究の限界

本研究はA大学の看護学専攻学生3年生60名から得られたデータであり，結果を一般化することには限界がある。今後はデータ数を増やし研究を積み重ねる必要があると考える。

### 結 論

運動機能障害や意識レベルの障害があり，リハビリ

テーションの必要な患者を受け持った学生の実習終了後のレポートより，学生の学びを抽出し，内容分析を行った。今回のリハビリテーション患者を受け持った学生の学びの特徴としては，『安全確保の重要性と難しさ』，『リハビリテーションの必要な患者の思い』，『看護のやりがいの実感』の3点があった。

本研究の一部は第15回日本看護学教育学会（大宮市）において発表した。

### 文 献

- 1) 鈴木純恵，丹下幸子，細矢智子 他：成人・老人看護学実習における学生の学び—リハビリテーション看護領域の実習感想文より—，茨木県立医療大学紀要，9，119-131，2004.
- 2) 永山弘子，市村久美子，黒木淳子 他：リハビリテーション看護学実習における学生の学び，茨木県立医療大学紀要，10，85-95，2005.
- 3) 今泉郷子，島田広美，井上聡子 他：リハビリテーション援助論および課題別看護実習での学び，川崎市立看護短期大学紀要，8，77-83，2003.
- 4) 石鍋圭子，野々村典子，奥宮暁子 編：リハビリテーション専門看護 フレームワーク／ビューポイント／ステップアップ，3，医歯薬出版，2001.
- 5) 貝塚みどり，大森武子，江藤文夫：QOLを高めるリハビリテーション看護，28-29，医歯薬出版，2003.
- 6) 平山朝子，新道幸恵，赤津晴子 他：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて，看護学教育の在り方に関する検討会 報告書，文部科学省，2002.
- 7) 平山朝子，島内節，安藤智子 他：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標，看護学教育の在り方に関する検討会 報告書，文部科学省，2004.

## *Learning of the students who have undertaken the patients necessitating rehabilitation*

*Takako Minagawa, Ayako Tamura, Takako Ichihara, Yumi Kuwamura,  
Hiroko Kondo, and Takae Bando*

*Major of Nursing, School of Health Science, The University of Tokushima, Tokushima, Japan*

**Abstract:** The learning of the students who experienced rehabilitation nursing of patients having disturbance of motility and/or impairment of consciousness was analyzed from their reports after the clinical practice. As the result, 203 codes were extracted and classified into 39 sub categories and 11 categories. The categories were “understanding of the method of the rehabilitation nursing and consciousness of its necessity”, “importance of the grasp and difficulty of the judgment of the patient situation”, “thought of the patients who need rehabilitation”, “consciousness of the role as a nurse”, “necessity of the assist to the family”, “actual feeling of worth doing of the nursing”, “importance of the cooperation of the medical person”, “importance and difficulty of the communication”, “importance and difficulty of safety ensuring”, “importance and difficulty of explanation, guidance and education”, and “others”. It was found that the knowledge obtained through the rehabilitation nursing was mainly characterized with “importance of safety ensuring”, “thought of the patients”, and “actual feeling of worth doing of the nursing”.

*Key words* : practices, rehabilitation, content analysis, learning of the student